

# 日本語学習者の「ね」の習得に 関する一考察

日本語プログラム

木村 静子

## I はじめに

次のような会話は日常よく使われるので第二言語とし日本語を学習している学習者も、日本人同様耳にすることや使うことが多いだろう。

① A:「今日はいい天気ですね。」

B:「そうですね。」

② A:「きのうは寒かったですね。」

B:「そうですね。」

終助詞「ね」は初級の比較的早い段階で日本語の教科書に出てくるし(註1)、①②のような受け答えは学生にとってそれほど困難なものではないだろう。①-Aや②-Aの文に対して「そうです。」と言う学生はほとんど見られない(註2)。ところが、終助詞の使い方はなかなか難しいようで、中級の学生が作る文でも「ね」の脱落による間違いが目につく。そこで本稿では日本語学習者の「ね」の脱落による誤用文を分析し、どのような「ね」の用法が学習者にとって習得しにくいのかを検討していくことにする。

## II 「ね」の用法

ある種の助詞に終助詞及び間投助詞という名目をつけたのは山田孝雄(1936)である。終助詞は文末にのみ用いられ陳述の性質に関係し、命令、希望、感動等を表す。一方間投助詞はある一定の規則に従いはするものの文のいろいろな位置に割合自由にあらわれ、語勢を添えたり、感動を高めたりするために用いられるとしている。そして「ね」はこの間投助詞の中に分類され、親密の意味を表すとされている。呼び掛けの話、主格の話、条件を示す語、動詞の終止形や、格助詞、副助詞、係助詞などの下につくと記されている。

田中(1973)は終助詞・間投助詞を文末助詞・句末助詞とし、句末助詞を1)間を

もたせる句末助詞 2) 句末に情意を添える助詞 3) 語句を取り立てて強調する助詞に分類している。「ね」はその句末助詞の中の2) 句末に情意を添える助詞として、2) の助詞の性格は、文全体に話し手の気分を盛り込んでいく、文節末に広くつく、文節末の共存する時には文末助詞の後につくの三点としている。

上野(1972)は終助詞を意味内容から二分類した。それは、1) 話し手の判断を聞き手に主張する類と、2) 話し手の判断を示し聞き手に最終的に判断を委ねる類であり、「ね」は「ねえ・な・なあ」と共に2) 類に入っている。「ね」は相手の反応を期待して用いられ、平叙文の外に、命令文、依頼文、疑問文にも用いられるとしている。

大曾(1986)は、終助詞「ね」は話し手と聞き手の間に同じ程度の情報や同じような判断・考えが存在することを前提として用いられるとし、その用法を1) 確認を求める、2) 同意を求めるに分別している。更に、返答として「そうですね」が使える場合と、使えない場合を次のように示している：

使える場合 ――話し手と聞き手が同じ情報を持っているあるいは同じ判断をしているということをお互いに確かめ合う時

使えない場合 ――聞き手自身のことや聞き手の身内のことなど、聞き手に関することを言われた場合には、その返答として「そうですね」は使えない。

陳(1987)は話し手が自分の認識を確かなものにする時に終助詞「ね」が用いられるとし、次の4つの用法を示している。

- 1) 話し手がある程度認識している事柄について、より確かに認識していると考え、聞き手に問うことによって自分の認識を高める場合。
- 2) 話し手と聞き手が同じ場面にいる事柄について、聞き手も同じように認識しているだろうと話し手が考えて発言する場合。また、聞かれてそれに答える場合にも「ね」が使用される。
- 3) 話し手が聞き手よりもよく知っている事柄について発言する場合。
- 4) 働きかけや勧めの場合。

神尾(1990)は情報が誰のものか、その情報が誰にとって最も関心があるのかを明らかにすることを目的とした、情報のなわ張り理論という理論を示した。そして、情報の所有あるいは情報との関わり、その情報の証拠性、文の丁寧さという枠組みのなかで「ね」の用法をとらえた。

益岡(1991)は「ね」が使用される文として、1) 話し手の知識を聞き手に情報として伝えようとする演述型の対話文、2) 疑問型の対話文、3) 訴え型の対話文を示し、それらの文での「ね」の使われ方を示した。

### Ⅲ 分析のための資料

国際大学の日本語コース中級前期の学生が一学期間に提出した英文和訳の宿題及び作文を分析資料とした(註3)。

ここでいう中級前期というのは学習経験0のレベルから始め、1学期10週間のコースを3学期間終了した4学期目のレベルである。3学期と4学期の間には約3ヵ月の夏休みがあり、学習者はその間日本の会社などで働く者もあれば、自国に帰る者もありと、日本語との接触はさまざまである。

第4学期目の使用教材は、第1学期から使用している「日本語初歩」と「Communication Japanese Style II」の一部である(註4)。

学習者が提出した英文和訳と作文のうち「ね」の使われている文、あるいは本来使われなければならないのにそれが脱落している文を資料とした。尚、その資料を以下に示すように正しく使われている文と脱落による誤用文とに分け検討した(註5)。

<正しく使用されている「ね」>

1 A : 最近、学生が地方の大学に入る傾向があるらしいです。(9-AE示すように誤脱として扱った)

B : そうですね。

2 A : (旅行へ行って) いい景色を見たり、おいしい料理を食べたり、買物をしたりしたいです。

B : いいわね。もしお金があればどこでも行けますね。

3 A : 秋が来たら、奥只見に紅葉を見に行きませんか。

B : いいですね。

4 A : 外の約束をしないように村木さんに今電話をしましょうか。

B : そうですね。

5 A : (レストランのことを話題にしていって) そこへ行きましょうか。

B : それはいいですね。

6 A : 先週予約をお願いしておいた林田ですが。

B : 林田様でございますね。

7 A：春村先生、よくいらっしゃいました。

B：山下さんですか。ひさしぶりです。お元気ですか。

A：おかげさまで元気です。先生もお元気そうです。

#### <「ね」の脱落による誤用文>

8 中国料理が好きだそうです。次のパーティに何か作っていただけませんか。

9 A：最近、学生が地方の大学に入る傾向があるらしいです。

B：そうですね。

10 来月旅行するつもりだそうです。

(文脈より「旅行するつもり」なのは「あなた」ということがわかる)

11 私の国へ旅行したいそうです。

(文脈より「旅行したい」のは「あなた」ということがわかる)

12 母の作った料理があなたは確か好きでした。

13 来月夏休みになったら、あなたは中国へ行きたいそうです。

14 中国は発展途上国なのに旅行費用は高いそうです。

15 田中さんのお父さんが入院したそうです。どんな病気なのですか。

16 A：札幌からまいりましたから、疲れました。

B：そうですか。それは本当にお疲れになりました。

#### IV 結果

##### <正しく使用されている「ね」>

学習者が正しく使用している「ね」のほとんどの文は、相手の言ったことに対して答える形での「そうですね。」「それはいいですね。」の文である(上記の文の1・3・4・5)。これは大曾(1986)が述べているところの返答として「ね」が使える

場合の用法である。つまり、話し手と聞き手が同じ情報を持っている、又は同じ判断をしているということをお互いに確かめ合っている時の用法である。

陳(1987)の用法分類の一つに「主語と聞き手が一緒にいる場面の事柄について、話し手が認識した時に、聞き手も同じように認識しているだろうと話し手が考えて発言する場合、また話し手がそれに答える場合」(P.98)がある。この用法に該当する文は上記の1～5及び7-Bであり、正しく使用されている「ね」の文のほとんどである。では、残りの6と7-Aの文の用法を見てみると、それは話し手が自分の認識を確かなものにする為、聞き手の方が確かな認識を持っているということについて確認するという使い方(陳 1987)になる。

#### <「ね」の脱落による誤用文>

「ね」の脱落による誤用文を検討してみるとそれらの文の用法は同意要求(橋本 1992)と呼ばれたり、念押し(陳 1987)と呼ばれたりするものである。つまり自分の認識や持っている情報を確かなものにする為に聞き手に確認するというものであり、この場合、聞き手の方が確かな認識・情報を持っているということが前提になっている。

陳(1987)の定義をもとに正しく使用されている文と誤用文とを表にしてみると以下のようになる。

	話し手と聞き手が同じ場面にいる事柄について 聞き手も同じように認識しているだろうと話し手が 考えて発言する時・及びそれに対して答える時	確認する時
正しく使用されて いる「ね」の文	1・2・3・4・ 5・7-B	6・7-A
「ね」の脱落に よる誤用文	-----	8 ～ 16

#### V 検討

前述の通りこの研究は中級の日本語学習者が提出した宿題を資料として分析したも

のであるから資料の数も（各宿題4～12人分）資料中の「ね」の用法も限られていることは否めない。

まず正しく使用されている「ね」は、AとBが同じ場面において話をしている時相手も同じように考えている・思っているだろうと判断し、同意を求める為に一方(A)が他方(B)に使っている場合(2・7-Bの文)、及び同意を求められた(B)が、自分も同じ判断だということを示す場合(1・3・4・5の文)の用法がほとんどであり、この用法は習得しやすいと思われる。特に「そうですね。」は日本人と接する機会のある学習者の場合非常によく耳にするのではないだろうか。例えば、当たり障りのない話題としてその日の天気の話は「寒いですね。」「そうですね。」のようによく話される。また教室内では、学習者の答えに対して教師が「そうですね。」や「いいですね。」と言うのではないだろうか。そういうよく聞くフレーズとして定着しやすいのだと思われる。確かに「そうですね。」は習得しやすいと思われるがしかし、学生がスキットを作りそれを教室内で発表する時など、「そうですね。」と答えるべきところで「そうですね。」と言ってしまふ下記のような文の誤用がよく見受けられる。

A： あした東京へ行くつもりなんです。

B： \*そうですね。

このような場合、他人の領域に割り込んでくるような、あるいはBがAの行動をコントロールしているような印象を与えがちなので、やはり適切な指導が必要であろう。

次に「ね」の脱落による誤用文の検討を行なう。誤用文はすべて同じ用法の誤りである。つまり話し手が自分の持っている情報を確認する為に、より確かな情報を持っていると考えられる聞き手に対して使われる「ね」を脱落している。では、8～16の文をもう少し詳しく見ていくことにする。

まず、9・12・14・15・16（下記に再度記す）の誤用文を一つのグループとして検討する。

9 最近、学生が地方の大学に入る傾向があるらしいです Ø

12 母の作った料理があなたは確か好きでした Ø

14 中国は発展途上国なのに旅行費用は高いそうです Ø

15 田中さんのお父さんが入院したそうです Ø。 どんな病気なのですか。

16A：札幌からまいりましたから、疲れました。

B：そうですか。それは本当にお疲れになりました。 Ø

12・14・16の文は話し相手自身あるいは話し相手が属しているところの事柄（14の文における中国）について話し手が述べているからして、当然話し相手の方が確かな情報を持っているのは明らかである。そのような文において「ね」を脱落すると、大曾（1986）が述べているように「押しつけがましき」を感じる。すなわち、相手の心情・事情を汲み取ろうとすることがなく、一方的に話し手の持っている情報を相手に言うという感じを与える。9と15の文はそれぞれ第三者に関しての情報を間接的に聞き、それを話し相手に確かめている文であり、12・14・16の文ほどには一方的な感じはしない。これら5つの文は聞き手に違和感を感じさせる自然な日本語ではないものの、主語・主題が明示されているので聞き手が間違った情報をその文から得るようなことはない。しかし、次の8・10・11・13の誤用文（再度記す）はどうだろうか。

8 中国料理が好きだそうです Ø

10 来月旅行するつもりだそうです Ø

11 私の国へ旅行したいそうです Ø

13 来月夏休みになったら、あなたは中国へ行きたいそうです Ø

これらの文は目の前にいる話し相手自身のことについて外から情報を得、その得た情報を当人に確認しているものであり、上記のすべての文の文末に間接的に聞いた情報であることを示す助動詞「そうだ」がついている。8・10・11の文は文法的にも正しく、またこの文だけを聞いたなら初めのグループの文とは違ってそれほど不自然な感じはしないだろう。但しこれらの文を聞いた時、「中国料理が好きな人(8)」、「来月旅行する人(10)」、「私の国へ旅行したい人(11)」は第三者になってしまい、「あなた」の意味にはとれない。13の文には「あなた」と明記されているが、日本語の母語話者が話す場合「あなた」は使われないことが多いと思われるし、「あなた」がなければ、「中国へ行きたい人」はやはり第三者になってしまう。つまり、「ね」の有無によって主語が変わってしまう。つまり主語なし文の主語を決定する手立ての一つに「ね」の有無があるのではないだろうか。

日本語は話の内容から主語が推測できる時には主語を落としても文法的に誤りではないし、そうすることのほうが多い。また、前後の脈絡なしに8・10・11のよう

な一文だけで提示されても日本語を母語とする者ならその主語は判断できるし、逆に話す場合には意識せずとも「ね」をつけて主語を明確にする。従って、8・10・11・13の誤用文は日本語の特徴の一つである主語なし文の主語がどのような要因から決定されるのかということの習得の難しさを表しているのではないだろうか。

## VI まとめ

以上、終助詞「ね」について、日本語を母語としない学習者の習得状況の分析・検討を行ってきた。話し相手に同意を求める時、また同意を求められた時の答えに使用される「ね」の用法は習得しやすいようであり、その理由としてはよく耳にすることが考えられ、殊に「そうですね。」は「そうです。」と「ね」の組み合わせだったものというより、「そうですね。」という一つのかたまりとして考えられているようである。それ故、「そうですか。」と言うべきところも「そうですね。」と言ってしまいう過剰使用が起こるのだと思われる。

日本語を母語とする者の会話では「ね」が非常によく使われるので、学習者が耳にする機会もそれだけ多いのだが、教室内で「ね」の用法を取り立てて教えることはほとんどないのではないだろうか。初級の段階で「寒いですね。」「そうですね。」のような使われ方を説明するぐらいで、その後一つの項目として用法を取り上げて教えることは稀であろう。逆に言えば、特定の規則があるわけではない自然な日本語や、主語の決定の仕方に関わることを教えるのは困難だろう。そこに確認の用法の「ね」の習得の難しさがあるのだと思う。

本研究の今後の課題としては資料収集の方法を検討し、確認の用法の「ね」の習得を更に研究していきたい。またその研究をもとに今後の授業でのより効果的な教え方を検討していきたい。

## 注

- 1 国際大学で使用している国際交流基金発行「日本語初歩」で「ね」が初めて導入されるのは第六課で、次の文である。。

あれはばらの花です<sup>㊦</sup>。(P. 41)

はい、そうです。

けのくつしたは一そく千円ぐらいです。(P. 42)

たかいです<sup>㊦</sup>。



はい、けのくつしたはたかいです。

- 2 「ね」の用法を習得したという意味ではなく、①②のような、時候の挨拶などの文に対して「そうですね。」と自然に応答できるという意味である。
- 3 提出した宿題数はどの宿題も同じではなく、宿題によって数に変動があり、4～12人分である。その点で均一性に欠けることは否めないし、また、宿題も「ね」の用法をみるためのものではないので、それぞれの宿題のうち、「ね」が必要とされる文を検討したのみであり、「ね」のいろいろな用法は検討することができなかった。
- 4 第4学期目には「日本語初歩」の28課と30～33課を行ってこのテキストを終了させ、その後「Communication Japanese Style II」の11～15課を行なう。
- 5 宿題となった和文英訳の英文のほうは次に記す。

<正しく使用されている「ね」>

1 A: I heard that recently there is a growing tendency for students to wish to attend regional universities.

B: That's correct.

2 : 学生の作文より

3 A: Say, when fall comes, why don't we all go to Okutadami to see colored leaves?

B: That's a great idea.

4 A: Then, why don't we call Muraki-san now so she won't make other appointments.

B: OK.

5 A: I've been there twice. Shall I take you there?

B: That'll be wonderful.

6 A: Hello, I made a reservation last week. My name is Hayashida.

B: Mr. Hayashida.

7 A: Professor Harumura, welcome!

B: Is that you, Mr. Yamashita? It's been a long time. How have you been?

A: Thank you, I've been fine. You look very healthy.

<脱落による誤用文>

8 A: I heard you like Chinese food very much. Can you make some for our next party?

9 A: I heard that recently there is a growing tendency for students to wish to attend regional universities.

B : That's correct.

10 ~ 14 学生の作文より

15 : I have heard that Tanaka-san's father has been in hospital. What is wrong with him?

16A : Flying from Sapporo made me tired, so I'd like to rest.

B : You came from Sapporo! No wonder you are tired.

#### 参考文献

- 上野田鶴子 1972. 「終助詞とその周辺」『日本語教育』17 pp.62 - 63
- 大曾美恵子 1986. 「今日はいいい天気ですね。」『日本語学』5 pp.91 - 94
- 大野 晋 1977. 「日本語の助動詞と助詞」『識語日本語7 文法II』PP.1 - 28
- 神尾 昭雄 1990. 「情報のなわ張り理論」『言語』19 大修館 pp.44 - 51
- Sawyer Mark 1992. The Development of Pragmatics in Japanese as a Second Language : The Sentence-Final Particle NE. In Gabriele Kasper (ed.), Pragmatics of Japanese as Native and Target Language. Univ. of Hawaii; Second Language Teaching & Curriculum Center. pp.85 - 113
- 田中 章夫 1973. 「終助詞と間投助詞」『品詞別日本文法講座 助詞』明治書院 pp.210 - 247
- 陳 常好 1987. 「終助詞—話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞」『日本語学』6 pp.93 - 109
- 永富 明子 1991. 「実用的終助詞研究」『日本語教育・実践と考察』浅野百合子先生古希記念論集 PP.104 - 115
- 橋本 修 1992. 「終助詞「ね」の、意味の型とイントネーションの型」『日本語学』11 pp.89 - 97
- 益岡 隆志 1991. 「終助詞「ね」と「よ」の機能」(『モダリティの文法』) くろしお出版 pp.92 - 107
- 山田 孝雄 1936. 「第二章終助詞・第二二章間投助詞」(『日本文法学概論』) 宝文館出版 pp.508 - 531